セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報
「文明とやきもの」展特集号2

No.33

発　行　1996.8.31
編　集　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　山　田　陸　三
佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
〒844 TEL0955・43・3681 FAX0955・43・3324
印刷所　山口印刷株式会社・伊万里市

青花寿字文大壺　　中　国　南京博物院
羊形リュトン（坏）（右上）　ギリシア　大英博物館
釉彩蛇魚文大皿（右下）　フランス
ヴィクトリア&アルバート博物館

「文明とやきもの」展開幕式（1996年7月19日）

「文明のあけぼのとやきもの」（第１展示室）

第１展示室の特徴は、主に紀元前数千年間の土器を紹介していることと、やきものの製作地が広範囲に及んでいることです。それで、古代の雰囲気をどうつくるのかという難しい問題がありました。エジプトのピラミッド、ギリシアの城砦、メソポタミアのジッグラト、中国の土塁などの建造物を考え合わせ、結局、写真（下）のような擬岩に落ち着きました。

古代エジプトのコーナー（擬岩のある部屋）

古代日本のコーナー（擬岩のある部屋）

［ 出品物の周辺 ］

役者文クラテル（酒器）

クラテルは葡萄酒を入れる容器です。赤絵式の絵付で、口縁下に月桂樹の葉文、胴下部にメアンダー文、把手下にパルメット文が描かれています。

当時、この土器が作られた南イタリアにも、ギリシア人は多くの植民市（例えばネアポリス、現ナポリ）をすでに建設し、ギリシアの文物を輸入していました。

役者文クラテル（酒器）
イタリア南部　アプリア　B.C.380頃（大英博物館蔵）

この土器もギリシアの製陶技術で作られたのです。もっとも、この土器の製作後、約100年で南イタリアはローマに征服されます。

鴨 形 土 器

鴨の胴上部には円筒が立ち、羽が貼り付けられ、部分的に自然釉が流れています。胴下部には脚がつき、縦長の透孔が入っています。副葬品と考えられます。

鴨形土器（１対）（伽耶土器）
韓国　5～6世紀　三国（伽耶）（韓国国立中央博物館蔵）

鴨形土器は伽耶地域によく見られますが、それは鴨が伽耶地方で神鳥として信仰されていたから（世界陶磁全集17）とされています。

この鴨形土器の一対が、韓国では切手の図案に採用されていました（下図）。　（藤井伸幸）

「東洋陶磁の美」（第２展示室）

東洋のやきものの特質は白くて堅い磁器をいち早く生み出したことにあります。隋・唐・宋代から14世紀頃までは、青磁・白磁が中心でしたが、14世紀に青い絵文様を白地に表わす染付技法が本格的に始まり、明代の16世紀になると染付（青花）が主流となります。中国で発展した磁器の技術が朝鮮、次いで日本に伝播し、それぞれ特色ある磁器が作られました。

中国の磁器製作工程を描いた回る絵皿

展示室前には曼荼羅のように９枚の回る絵皿が鮮やかな赤地に浮かび上っています。遠目には絵皿のようにみえる９枚の円板には、清時代の世界最大の窯・景徳鎮窯での陶土採掘から製造、出荷までの磁器製造工程が描かれており、東洋の世界を連想させてくれます。

中国陶磁のコーナー

展示室内も中国の清朝の宮廷を思わせる朱色の太い柱と手彫りの龍を表した欄間で飾られ、中国陶磁の名品を鑑賞する手助けをしてくれます。寿字を一万字、それも書体を変えて書き込んだという清時代の青花大壺（表紙参照）は、いかにも中国的で見る人をあっと驚かせる一つです。

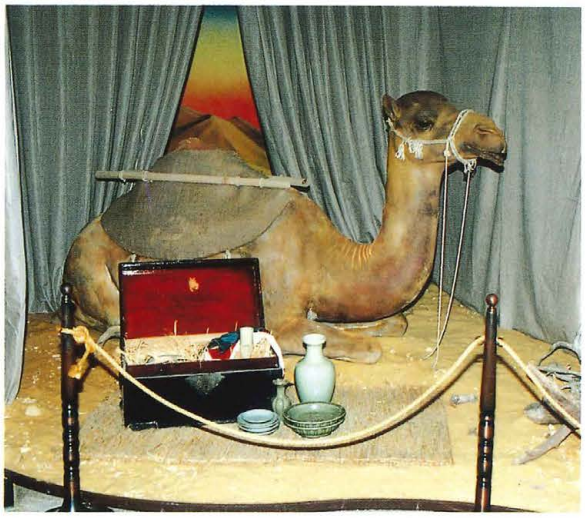
中国・元の青花龍文大瓶
（パーシヴァル・デヴィッド財団蔵）

朝鮮の高麗青磁筍形水注
（韓国国立中央博物館蔵）

朝鮮のコーナーでは、高麗時代の青磁が中国の影響を受けて始まったとはいえ、独特の味わい深い青磁釉であり、目を奪われます。日本の中近世の陶磁史を14点位で紹介するのも無茶なことかもしれませんが、世界のやきものをバランスよく紹介するためにはやむをえません。代表的名品によって陶磁史を凝縮した展示を行っています。（大橋康二）

「イスラム世界とヨーロッパ」（第３展示室）

「東洋陶磁の美」の展示室をでると、次にやってくるやきものの世界は「イスラム世界とヨーロッパ」です。展示室の間には、陸路によるやきものの旅を象徴する砂漠のラクダが一休みしています。首や口の動く、リアルなラクダにびっくりしているお客様たちも多く見受けられました。



やきものの旅を象徴する展示造作のラクダ

展示室は、イスラム建築を模したアーチ状の柱と壁龕（壁にしつらえたくぼみ）や、ヨーロッパの室内装飾とキャビネット（飾り棚）によって、やきものがこの地域でどのような空間にあったかを再現しています。

「イスラム世界」の展示

「ヨーロッパ」の展示

イスラム世界とヨーロッパというこの両地域では白い泥漿や釉によって素地を白く化粧掛けした「白い陶器」が展開しました。これら白い陶器は青、緑、赤、褐色、金属光沢（ラスター）などの多彩な色で装飾文様が施されています。東洋のやきものが高火度の炻器や磁器をいち早く産出したのと対照的に、白地に色をもって文様を描いた、軟らかい陶器の時代が長く続きました。なかでも、最も華やかなのがトルコのイズニク陶器でしょう。この展示室でも壁面に掛けられた組タイルはひときわ目立つ存在です。やきもので建築を装飾することはこの両地域で特徴的にみられる現象です。この作品はその意味で、この展示室のやきものの世界を代表するものといえます。　　（永渕友子）

白釉多彩花文組タイル
トルコ　イズニク窯　16世紀（ヴィクトリア＆アルバート博物館蔵）

「陶磁の東西交流」（第４展示室の１）

第４展示室の入口の手前には、オランダ船の倉庫を模したコーナーがあり、藁で梱包したやきものを詰めた樽が並んでいます。藁を用いた伝統的な梱包は今日ではほとんど行われなくなりましたが、かつての梱包の様子を再現したものです。

オランダ船の倉庫を演出したコーナー

第４展示室に入ると正面に、ドレスデンのツヴィンガー宮殿から出品された中国景徳鎮窯の蓋付大壺があります。ザクセンのアウグスト強王は中国陶磁を入手するために、600人の騎馬兵と交換するほど収集に熱心だったのですが、この作品はその交換品と同型品で大変見栄えのするものです。

展示室の隅に、オランダの画家ハンス・フェルメールの17世紀の室内画をもとに構成されたコーナーがあります。フェルメールは窯業地として名高いデルフトの人です。テーブルの上に中国の芙蓉手を模した皿が置かれ、果物を盛って演出しています。

フェルメールの描いた室内の再現

「陶磁の東西交流」のゾーンは、金色の壁と赤い展示台でまとめられています。ロココ様式のヨーロッパの宮殿は金色を主体とした華やかな雰囲気であるため、そのイメージをもとに構成されました。ここには輸出された中国や日本のやきものと、それらに影響を受けたヨーロッパのやきものを展示しています。有田で作られた輸出品と、ドイツのマイセン窯でそれを写した製品を並べていますが、両者を見くらべて来館者は楽しんでいます。　（鈴田由紀夫）

金色の壁と赤い台の展示室

左：有田窯の壺（九州陶磁文化館蔵）
右：マイセン窯の壺（ドレスデン国立博物館蔵）

「南北アメリカのやきもの」（第４展示室の２）
－造形を楽しむ土器の世界－

第４展示室に出現したピラミッドにご注目下さい。南北アメリカ部門は、このスペースに紀元前200年から20世紀前半までの時間と、現在の国名でいえばアメリカ合衆国、メキシコ、グアテマラ、ペルー、エクアドル、ベネズエラ、コロンビアの７カ国の地理的な広がりを、選ばれた18点の土器で紹介しています。

「文明とやきもの」展の基調となる歴史的、文化史的な陶磁器の展示とは違い、ここには古今東西の名品はありません。

アステカやマヤ文明を育んだ中央アメリカや、インカ帝国へ受け継がれるプレ・インカ文明の興った南アメリカ、ネイティブ・アメリカンの豊かな文化がひろがる北米など、様々な部族の生き生きとした姿が、私たちの目を楽しませてくれます。器の形も野菜形、蛙・ジャガー・魚や人頭をかたどったものまであり、当時の人々の生活が想像できるようです。

ロサンゼルス・カウンティ美術館所蔵のメキシコを中心としたコレクションはおよそ千点といい、表情豊かな人物像は必見です。髷（まげ）が宇宙人のアンテナのような「加彩土器男性座像」は、体に描かれた入れ墨か衣裳の模様が赤褐色と黒で鮮やかに残り、器を手にしています。

国立アメリカ・インディアン博物館所蔵のペルー、モチェ文化の不思議な土器「鐙形瓶」は、乗馬の時に足をのせる鐙の形からついた名称です。説明よりも、まず見て欲しいのがこの南北アメリカ部門です。

（宮原香苗）

「加彩土器男性座像」（ロサンゼルス・カウンティ美術館蔵）

「加彩土器槍投げ戦士像」（ロサンゼルス・カウンティ美術館蔵）の展示

加彩土器髭の男性座像と女性座像
（国立アメリカ・インディアン博物館蔵）

ロサンゼルス・カウンティ美術館出品の中央アメリカのやきもの

国立アメリカ・インディアン博物館出品の
南北アメリカのやきもの（鐙形瓶は下段左から２点）

「近代の幕開け」（第４展示室の３）

近代のゾーンは２ケース11点で、他のゾーンにくらべると展示数が少なく、物足りないかもしれません。しかし19世紀から20世紀のアメリカとイギリスの陶芸作品によって、近代の陶芸の潮流をある程度示すことができました。

たとえばアメリカの場合は、薩摩の金襴手の影響を受けたような作品が最初に並んでいます。１９世紀後半に薩摩焼はアメリカやヨーロッパへたくさん輸出され、その影響と見られるやきものがあります。この作品も薩摩風の特徴が表れていますが、文様は似ていても絵の具が油絵風に盛り上がっています。

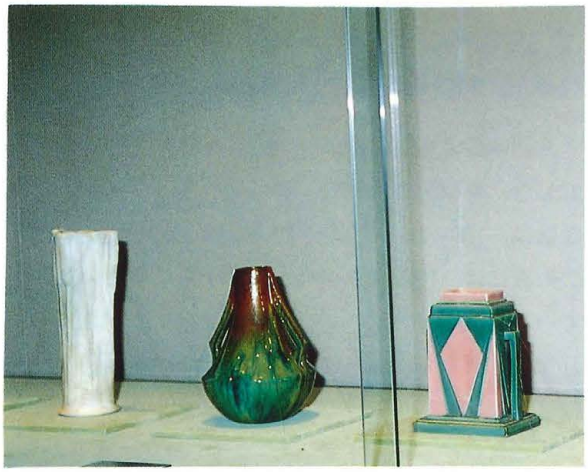
「近代の幕開け」のゾーン

1900年ごろ欧米ではアールヌーボー様式が流行しますが、その影響によるティファニーの作品が出品されています。蒲の穂の文様をレリーフで表現し白釉をかけた花瓶ですが、アールヌーボーの様式がよく表れています。来館者にティファニーの作品であることを解説すると、銀の装身具などでよく知られた名前なので注目されます。

アールヌーボー様式の次には1930年ごろ流行したアールデコ様式の作品を展示しています。アールヌーボーが曲線的な様式であるのに対して、アールデコは直線的な様式です。

イギリスのコーナーには、日本の七宝焼のデザインを参考にして作られたミントン社の小さな花瓶があります。当時の先駆的な工業デザイナーであるクリストファー・ドレッサーによるデザインです。

（鈴田由紀夫）



アールヌーボー・アールデコの作品
（エバーソン美術館蔵）

七宝焼のデザインを取り入れた花瓶
ミントン社　1869年作
（ミントン博物館蔵）

陶磁の東西交流を示す演出
（エントランスホール）

佐賀県立九州陶磁文化館　名品図録
1996年版刊行のおしらせ

九州陶磁文化館が開館したのは16年前、1980年11月でした。準備段階の1978年から始まるコレクションの総数は、1996年3月末現在で3,498件と充実しています。この数には、1992年以来柴田夫妻からご寄贈いただいている膨大な有田磁器（全2,257件5,367点：1996年3月末現在）もふくまれていますが、この名品図録は、館独自に収集した陶磁器と柴田夫妻コレクション以外の寄贈資料から選りすぐった182件で構成しました。

肥前の陶磁器は唐津系陶器13件、時代やスタイルを細分化するまでに研究の進んだ肥前磁器は合計103件と質量ともに充実しています。その内訳は、1610～40年代の初期伊万里様式14件、初期赤絵や古九谷様式の色絵が誕生した正保期（1640～50年代）の古伊万里様式10件、技術の向上とともに新趣向の染付や銹釉などがみられる承応期（1650～60年代）の古伊万里様式13件、初期の輸出磁器をふくむ寛文期（1655～70年代）の古伊万里様式８件、技術的に完成された延宝期（1670～90年代）の古伊万里様式の染付磁器4件、同くじ延宝期に開花した柿右衛門様式の色絵磁器13件、輸出タイプの古伊万里グループは寛文期から元禄期まで18件、金襴手と呼ばれる金彩鮮やかな元禄期（1690～1750年代）の古伊万里様式３件、初期から盛期までの鍋島藩窯の磁器20件です。佐賀県以外の九州のやきものは、収蔵品の少ない大分県・宮崎県を除く長崎県15件、福岡県12件、熊本県10件、鹿児島県７件、沖縄県６件、さらに有田磁器とかかわりの深い中国磁器９件、陶磁の東西交流を裏付けるヨーロッパ陶磁器８件が加わりました。

「染付牛人物文水指」（No.17）は雅趣のある初期伊万里の茶陶、「色絵樹鳥波文大皿（青手）」（No.44）は有田で焼かれた古九谷様式磁器の逸品、華やかな「色絵花鳥文六角壺（柿右衛門様式）」（No.74）はヨーロッパでそっくり模倣されるほど人気のあったものです。鍋島藩窯の初期、いわゆる「初期鍋島」とよばれる「色絵薄瑠璃唐花文菱形皿」（No.98）も格調のあるデザインと高い技術の光る一点です。

12月１日（日）から再開する常設展「九州の陶磁」には、「名品図録」中の名品が一堂に並びます。ぜひご一覧下さい。

「染付牛人物文水指」（No.17　左上）
「色絵樹鳥波文大皿（青手）」（No.44　左下）
「名品図録」1996年版（中央）
「色絵花鳥文六角壺（柿右衛門様式）」（No.74　右上）
「色絵薄瑠璃唐花文菱形皿」（No.98　右下）

利　用　案　内

開　館　世界・淦の博覧会期間中は無休。
９：30～18：30　９月１日(日)まで
９：30～17：30　10月13日(日)まで
10月14日(月)～11月30日(土)は休館。
○12月１日(日)からは通常にもどります。
９：00～16：30　月曜休館
年末年始の休館は、12月28日～１月１日（試行）。

観覧料　「文明とやきもの」展は特別料金。
一般200円（150円）　大学生150円（100円）
小・中・高校生は無料。
（　）内は20人以上の団体料金。
特別企画展は、その都度定めます。

交　通　ＪＲ九州　佐世保線有田駅下車、徒歩約10分